

孤独の香り・一冊の本、一冊のアルバム

孤独の香り

世に飲み物はいろいろあるが、「大人の孤独」という表現に最も相応しい飲み物は、コーヒーだという感じがする。三島由紀夫の『夜会服』という小説の中に、コーヒーの味が分かって初めて大人の孤独を理解したというような件くだりがある

ブラ、デーやワインなどもそういう感じはするが、やはりバツカス神の産物だから陶醉感がつきまとう、ステイック静的で、深い精神性があつて、瞑想的という趣を具えているのはコーヒーにつきる。コーヒーを文化にまで高めたのは西洋の功績だ 日本の茶道は侘び、寂びという精神だから趣が少し違う。

妻の姉が群馬県の沼田市に住んでいるが、城址公園の傍の自宅の隣接地で、「針葉樹」という喫茶店を営んでい

た。私も一度行ったことがあるのだが、店内には画家である末の妹の絵が数枚掲げられ、義姉らしいセンスのある落ち着いた雰囲気の内装が施されたいい店だった。その店を寄る年波で彼女が閉じた時、店で大事に使っていた素敵なコーヒーカップと受け皿を私たち夫婦にプレゼントしてくれた。その器で飲むコーヒーは気分がいい。

私の家も一時コーヒーに凝って、ハイマウンテンやフルーマウンテン、キリマンジャロ、モカなどといった豆を買ってきて家で挽き飲んだ。今は妻が生協から購入した粉状のコーヒーを使っている。

私は衰えた足腰の運動のためたまに散歩に出るが、その途次コーヒーショップに立ち寄って飲むコーヒーも味わい深い。散歩は小田原駅の周辺である。駅の近くの喫茶店で休憩をとる。なんの変哲もない小さな店であるが感じがいで入る。そこでブレンドコーヒーの香りを楽しみながら、心の重荷を取り払い、解放感に浸る。とりとめもない想像に身をゆだね、瞑想に耽る。こんな時間こそ貴重な生活のサイクルだ。

昔イタリアに旅行した時、ヴェネツィアのサンマルコ広場に在る、一七二〇年創業の世界で一番古いコーヒーシヨツプカフェ。フロリアンに入つて妻と二人で飲んだコーヒーの味も忘れ難い。多勢の観光客が露店のテーブルで楽団の演奏に耳を傾けながら、思い思いに飲み物を口にしていた。私は映画の『旅情』の一場面を思い出しつつ、文字通り暫しの旅情に浸つた。

バツ八に『コーヒーカンタータ』という愉快な作品がある。娘が流行のコーヒーを好むので父親が困るという内容だが、あの時代は今と違って謹厳な大人たちが眉をひそめる飲み物であつたらしい。コーヒーについて十分語るほどの蘊蓄はないのだが、病気で二年間ほど禁酒していた経験がある。その時はコーヒーを飲むことだけが楽しみだつた。これからも私の生涯の伴走者となりそうだ。

一冊の本、一冊のアルバム

私の生家は私が二十七歳の時に火事で焼けてしまった。軽い認知症になつた父の不始末による失火で昼火事であつた。哀れな父の最後の姿を思い出すと今でも胸が痛くな

る。父を憎む気持ちは全くなく、日本の高度経済成長の時代から取り残され、傾いた家運の行き着いた末の悲劇と受け止めている。私はまだ結婚しておらず、勤めに出ていない。私は現在八十歳も疾うに過ぎ、ふと自分の死期を考えることもある。生家は今は三階建ての鉄筋コンクリート造りに変わった。

火事で黒焦げになつた水浸しの残骸の中でそれらしい形を留めていたのは、陶器や硬い鉄製の物だけであつた。尤もそれらの品物も大部分がもう役に立たなかつたが、焼け残つた物でまともなのはほんの数点であつた。その中に私の一冊の本と一冊のアルバムがあつた。

焼失を免れた一冊の本は、ハーマン・メルヴィル作、阿部知二訳の『白鯨(Moby Dick)』で定価三三〇円という全集もの一つであつた。それは濡れてはいたが奇蹟的に無傷に近かつた。

アルバムの方は表紙も台紙もところどころ黒く焦げている。しかし写真そのものは傷んでいなかった。このアルバムは私の少年期から学生時代の終わりまでを収録したものである。写真の数は多くはないが、これがなかつたら私は

昔を想起するよすがを永遠になくしたであろう。写真数が

多くないのは(殊に幼児期のそれが少ないのは)、私が七人姉弟(せふでい)の五番めに当たる次男で、両親にとつてもう珍しい存在ではなかったからかもしれない。それに世界大戦があった。あの苛酷な戦争の最中終戦後の混乱期に、日常生活のスナップ写真などを撮る人は一般家庭にはあまりいなかったのではないだろうか。

人はどちらかといえば、不幸なことや悲しい時の写真よりも、おめでたいことや楽しい時の記録を残したがると思う。私のアルバムもそうである。遠足や運動会や修学旅行の写真が多い。今それらの記録に接すると私は折々の出来事を、もの悲しい懐かしさで思い出す。それは帰らざる日々への感傷がそうさせるのだろう。

「白鯨」は、学生時代に読んだ本の中では私が最も感銘した愛読書の一冊であった。

私は浅学なので海洋文学について詳しくは知らない。

ジヨセフ・コンラッドのものやヘミングウェイの『老人と海』、少年時代に読んだ『宝島』や海洋文学と云えるかどうか分からないが『ロビンソン・クルーソー』など楽しく

読めた。その他に今までにいくつかの海を扱った小説や詩に出あった。が、『白鯨』に勝る感動を与えてくれた作品はなかった。それは若く多感な年ごろに読んだせいかもしれない。それに海の近くで育ち親しんでいたことにもよる。あの冒険の面白さと深遠な哲学を兼ね備え、海という大自然の持つ美しさ、強暴さ、神秘さを教えてくれた『白鯨』は、私にとつていちばん読み応えのある身近な青春の書であった。

学生時代のある短い期間東京に下宿していた時を除けば、生まれてからこのかた八十三歳になる今日まで(こんにち)、私はこの小田原という狭い町で暮らしたことになる。ちようど海底にへばり付いて生きている貝のように。エイ八フ船長のように世界を駆け巡るといふわけにはいかなかった。しかし、私は時々この火事で焼け残った一冊の本と一冊のアルバムを繙(ひもと)いては、苦く辛い日々であったが張りつめていた當時を思い出し気持ちを新たにするのである。

完